上関原発のない未来を！柳井地域の会・設立記念公演

朗読劇
線量計が鳴る
―元・原発技師のモノローグ―

中村敦夫ひとり語り

原発事故ですべてを奪われた老人。その真摯な独白が、不毛の荒野にかすかな光をもたらす。いったい、だれが責任をとるのか。

2017年10月1日(日)

開場 １３時半 **公演** １４時～１６時

アクティブやない多目的ホール

〒742-0021　柳井市柳井 3718-16　Tel・Fax　0820-24-0081

全席自由　前売り１０００円（当日１２００円）　大学生以下無料

主催：上関原発のない未来を！柳井地域の会（代表・中川隆志）
協賛：原発いらん！山口ネットワーク　自然エネルギー推進ネット・光　脱原発平生町民の会
問い合わせ：電話・ＡＦＸ：０８２０－５５－６２９１（小中）

挑戦　　中村敦夫

福島の原発事故以来、私は表現者として何を描くべきか迷い続けてきました。

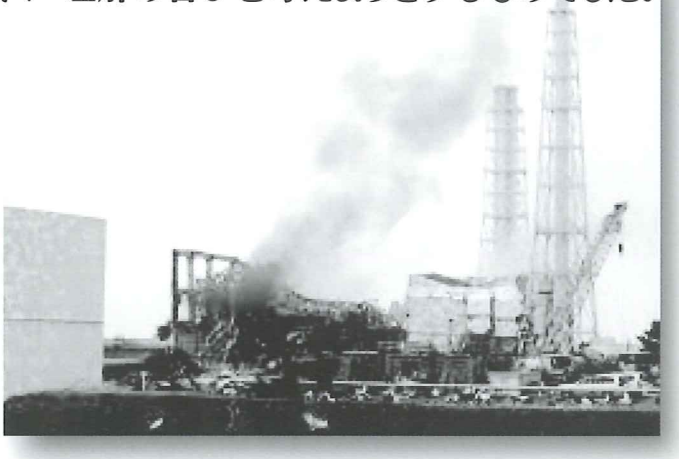
社会哲学としても政治哲学としても、私はエコロジーを中心思想にあげてきましたので原発問題は最重要テーマのひとつでした。

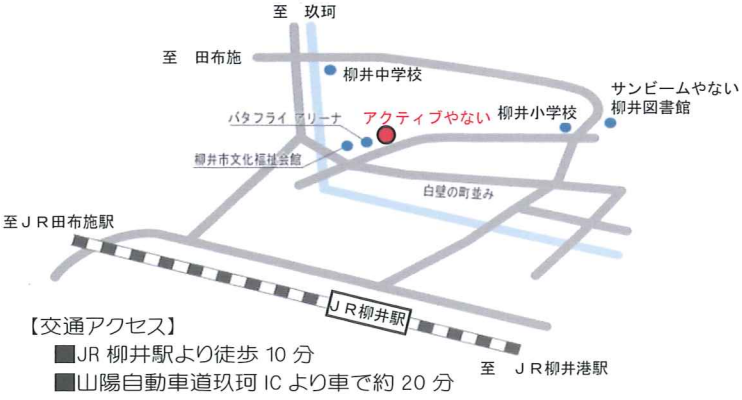
しかし、実際に事故が起きてしまうと、更なる知識と理解の必要性を痛感しました。何度か福島を訪ねたり、チェルノブイリを視察したり、資料を読み込んだりしているうちに、どんどん時が過ぎてしまいました。

そこで、これまで私が直面した課題の中から、最重要と思われる部分を選び出し、『劇』の形で人々に伝えようと決意しました。

私が青春時代を過ごした新劇界は、社会問題と正面から取り組み、オピニオンリーダーの役割を果たしていました。特に私が所属していた劇団俳優座は、ベルトルト・ブレヒト（ドイツの劇作家）の提案する新しい演劇理論の実践に挑んでいました。

従来の演劇は、社会を人間関係や個人の問題として捉え、観客の情念や感情を揺さぶる技術をドラマツルギーとしてきました。これに対し新しい演劇は『啓蒙演劇』と呼ばれ、社会の不条理や不幸をもたらす構造を分析し、発見の驚きや、理解の喜びを与えようとするものでした。私がこれら上演する『線量計は鳴る』は、この種の演劇の延長線上にある『情報演劇』とでも言うべき実験作品のつもりです。





【交通アクセス】
■JR 柳井駅より徒歩 10 分
■山陽自動車道玖珂 IC より車で約 20 分

アクティブやないへのアクセス

中村敦夫（なかむらあつお）

一九四〇年東京生まれ。小・中学校時代をいわきで過ごす。磐城高校に入学したが、半年後に都立新宿高校に転校。東京外国語大学を中退して俳優の道へ進み、一九七二年放映の「木枯し紋次郎」が空前のブームに。ニュースキャスターや参議院議員なども務め作家としても活動している。主な著書に「チェンマイの首」、同志社大学講義録「簡素なる国」など。